

の他の要素が50%である（べきである）」というものだ。アートの50%は変わらないが、残りの50%の要素は各プロジェクトの内容によって変わる、としている。両者がバランスを取ることで、「ビジネスがアートを育て、アートがビジネスを育てる」という創造都市論のような相互作用の発揮を狙っている。また買い物やオフィスに通勤する来場者にとっては、日常生活（この場合は商業・サービス業・ビジネス）の中で同時にアートを体験することが可能となる、とするものである。

フランスの文化相アンドレ・マルローが唱えた「文化のための1パーセント」（1980から1990年代）と比べると、50%というのは非常に意欲的で大胆な主張である。

グラジーナ・クルチェクは1950年11月5日ポズナン生まれ。肩書きとしては法律家、起業家、ならびに芸術作品のコレクターとして知られている。アダム・ミツェヴィチ大学（ポズナン大学）卒業後、裁判官の傍ら母校で民法の研究所に勤務。数年後、彼女の夫とのビジネス展開に従事し、法律関係の仕事に辞任してビジネスに専念することとなった。非常にユニークな経歴を持つ企業家である。

スタルィ・プロヴァルは、クルチェクが手がけた「アイデア50 50」に基づくプロジェクトの中でも象徴的な旗艦事例で、ポズナンの観光スポットのひとつであり、(1)沿革にも示したように数多くの賞も受賞している。

同氏は、公式ウェブサイトで、スタルィ・プロヴァルの解説として次のように語っている。

「人生と芸術（アート）が出会う場所 — スタルィ・プロヴァル50 50は、グラジーナ・クルチェクが展開する事業の中の旗艦施設です。ここでは買い物、ビジネス・ディナー、お母さんとのコーヒー・タイム、友達との夜の外出といった日常の楽しみが、アートと出会う場所です。ここは誰もがアートに触れて、聴いて、見ることができ、そして最も重要なのはアートの創造に加わることができる場所であることです。」

「ブロー・アップ・ホール50 50」は、この複合施設を中心にアート活動を支える「アート・ステーション財団」の本拠地でもある。同財団はグラジーナ・クルチェクが研究者時代から構築し始めたアート・コレクションをもとに2004年に設立された。現代美術のコレクターやパトロンを主体とし、文化、芸術、教育、市民と文化の意識の発展、文化へのパブリックアクセスを増やすこと、特に才能に恵まれた人々をサポートすることを目指している。コレクションは、草間彌生など日本人も含め、世界中から質の高い作品を集めており、「スタルィ・プロヴァル50 50」内や「ブロー・アップ・ホール50 50」に、一部は永久保存として蒐集されている。また、財団は自身の活動以外に、他の文化施設の活動にも熱心に取り組んでおり、毎年恒例の「世界ファッション&アート・フェスティバル」を開催している。

(4) 関連事項など

同プロジェクトは、高い質を維持し、アートとビジネスを合体させて相乗効果を生むという、ユニークな哲学によって裏打ちされている。

しかし、これらはグラジーナ・クルチェクという一人の卓越した才能を持った野心的な人物による産物と見ること

ができる。私有財産を認めない共産主義時代終了からごく短期間に、自身の才能を磨くのと同時によくもこれだけの財力を手にできたものだと感心する。

鉄のカーテン崩壊後、極めて短期間の間に、こうした一握りのチャンスを掴んだエリートが社会に大きな影響力を持つ活動を展開するというのは、ロシアを始め旧東側諸国でよく見られる現象である。彼ら彼女らは、恐らく持って生まれた資質も優れていたであろうが、偶然にも家庭環境や人的ネットワークなどに恵まれ、西側と遜色のない高等教育を受け、西側から奔流のように流入する資本を繋ぎ止め、個人の才覚を最大限発揮して知性の面でもビジネスの面でも世界的に見て突出した成果を挙げている。

共産主義時代の、ある意味で息の詰まるような閉塞した社会システムが崩壊し、一気に西側の自由な空気が流入した東欧諸国や中国では、旧システムの崩壊した隙間の空白地帯で、ほとんど周りから干渉されることなく、西側の自由主義社会を凌ぐ自由な雰囲気の中で一部の先駆的な試みが大きく花開くこととなった。

このことは、ごく短期間のうちに「失われた」共産主義時代の停滞を克服して一挙に21世紀の世界水準の活動を可能としたというプラスの面と合わせて、極端に貧富の格差が開いたことや、未整備の社会システムの綻びの中で西側では非合法のような振る舞いがまかり通ってしまうという負の側面をもたらしたのではないだろうか。

実際、同プロジェクトは2008年3月に市から企業への旧醸造所の土地売却に違反があり、市に財政的損失を与えたとしてポズナン地方裁判所に告発されて係争中である。

同事例は、継続して人気を博しており、俄かになにか問題となるようには見えないが、アートとビジネスを融合するというコンセプトが、今後どれくらいの創造的な効果を社会にもたらすことになるのか、今後の成り行きに注目したい。

大きなビール工場跡地の再開発という意味では、JR恵比寿駅の隣地や、JR尼崎駅前など、日本にも同様の事例がある。これらは、ほぼ全面的なスクラップ・アンド・ビルドで、設備の面ではほとんど歴史的な遺構は残されていない。また、複合ショッピング・センターにアートの機能を合体するといった斬新な試みはあまり多くは見られない。これら国内事例についても、国内外で比較しながら今後の展開に注目していきたい。

4. ファブリカ・チュシュチヌィ (Fabryka Trzciny) : ワルシャワのブラガ地区

ワルシャワのブラガ地区北部にあるファブリカ・チュシュチヌィ (Fabryka Trzciny) は、2003年9月、ヴォイチェフ・チュシチンスキ (Wojciech Trzciniński) によって戦前の古い工場を改装して設立された民間の独立系アート・センターである。

名称はもとの「工場」の意味と創設者の名前チュシチンスキを合わせたもので、今日の正式名称は「有限会社チュシュチヌィ・ファクトリー・アートセンター (Centrum Artystyczne Fabryka Trzciny Sp. z o.o.)」。

以下、同施設のウェブサイト (<http://www.fabrykatrzcin.pl/>) などを参考に概要を紹介する。